

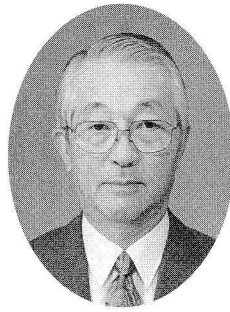
幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.40

平成22年8月26日

連盟会長としての使命



会長 藤本圭佑

この4月能楽連盟会長が四半世紀ぶりに交代した。現在の連盟を築かれた新堀前会長の功績は計り知れない。

顧みれば、平成元年の連盟規約制定による組織づくりと機関誌「幽玄」の発行、平成8年「横浜能楽堂」開館、さらには平成10年連盟創設50年記念大会と記念誌「お能と横浜」の発行と枚挙にいとまがない。

むしろその背景には、高岡・堀内両副会長をはじめ多くの役員の皆さんの献身的な協力があったことは言うまでもない。

そもそも連盟のルーツは、戦災の傷跡が生々しい昭和23年の「横浜能楽謡曲連盟」結成準備委員会発足にある。

会報一号『発足の辞』によると「我々の生活に怖るべき不幸をもたらした戦禍のため同好は敢なく四方へ散った。爾来、伝統のよさを新しい平和国家の再建に役立てようと能楽謡曲の道を信ずる我々は各自の立場を尊重しつつ流派を超越して同憂相励まし、斯道の将来を稽え、相互理解と研究親睦をはかる」としている。

ある。六〇〇年という長いときを脈々と受け継いできた能楽は、その道の専門の能楽師はもとより、江戸の武家、明治の華族・財界中心に栄えてき、いま市民愛好者がこれを支えている。能楽謡曲には、一般的に古い・高尚・難しいといったイメージがあるが、老幼男女誰もが楽しめる長い年月が紡いだ潜在的な魅力がある。2001年「たぐいなき価値を有する無形遺産」としてユネスコの世界無形文化遺産に指定された。このすばらしい能楽謡曲を次の世代にどう繋げるかが課題である。複雑多様な現代社会の中で、少子・高齢化も手伝って能楽を取り巻く環境が大きく変わっている。時流にあった謡曲愛好者の養成が求められると共に、若いうちに能楽に触れる機会を作る必要がある。新堀前会長というビッグネームの後任は大変な重責である。会員の皆さんが真に能楽を楽しめるよう、未来に向けた橋渡しに役立てるよう、役員の協力をエネルギーとし、たとえ波・風荒くとも船中安全に楽しく、彼の岸に漕ぎ着けることを、私の使命として力を尽くす決意である。

連盟会長退任にあたって

名誉会長 新堀 豊彦



昭和59年の夏から横浜能楽連盟の会長職をおおせつかつて約26年間、勤めさせて頂きました。連盟が存亡の危機にあった時、何もわからずひたひたり出され、無我夢中で再建に全力を傾け、同時に始まっていた、横浜能楽堂建設促進運動の渦中に入り、ともあれ目的を達成することが出来たのは、当時から御支援御協力を頂いた五流の先輩、同志各位に対し、心から篤く御礼申し上げますと共に、現在の各流の役員の皆様方についても、深甚の敬意と感謝を表したいと存じます。

趣味人の集りではありませんが、市との様々なつながり、能楽堂の運営などには、かなり公の面が強く、連盟自体、横浜における多くの文化団体の中でも、歴史があり、かつユニークな存在でもありましたので、重い責任を感じつつやって参りました。その在任期間の長さと、年令を考え、辞任させて頂きましたが、組織的にも、事業の面におきま

しても、心配することは全くなく、藤本新会長におまかせ出来るのは幸いこれに勝るものはありません。

お終りに私より長期にわたって活躍された、高岡、堀内両副会長、並びに原会計に謝意を表し、今後の連盟の発展を祈念して御挨拶いたします。

連盟報告(平成22年度前期)

企画事業担当 鈴木 力雄

平成22年度総会が、4月26日午後2時から横浜能楽堂二階レストランで開催された。

4月1日現在の正会員数509名(前年比16名減)、出席会員は40名、委任状提出253名で、合計293名で、総会は成立した。

新堀会長挨拶に続いて、横浜市民局文化振興部長 武井伊織氏、横浜能楽堂 熊谷敬子氏の来賓祝辞があり、会長が議長となつて議事に入った。

最初に議長から、議事録署名人として室屋、倉藤両理事の2氏が指名された。

議案の審議は、1号議案「平成21年度活動報告、決算報告、監査報告」、2号議案「平成22年度活動計画(案)、予算(案)」、原案通り承認された。

3号議案「役員の改選」は、

辞意を表明された会長始め、高岡、堀内両副会長、原、三谷、服部、杉山、三浦の各理事と鶴池監事が退任された。代わって観世流青山、佐野、梅若会安田、桑原、宝生流北見、喜多流大館、金春流澤田の7氏が新理事に、梅若会木部氏が新監事に就任された。(他の理事は留任)

ここで新堀会長が退かれ、一旦休憩に入り、新理事による臨時役委員会を開催し、会長に藤本、副会長に井實、吉田、馬場の3氏が互選された。

また藤本会長から、前会長に名誉会長を委嘱するため、休憩後の総会に規約改正の提案があり、同意を得た。

こうして藤本会長が議長となり、総会を再開し、新体制の紹介及び規約改訂の議決を得た。また総会後に第1回、6月18日に第2回理事会を開催し、規約に定める事務局の担当理事が次のように決まった。

総務会計 担当主幹 倉藤理事
担当補佐 安田理事
企画事業 担当主幹 鈴木理事
担当補佐 青山理事
普及広報(含 幽玄編集) 担当主幹 糸理事
担当補佐 室屋、桑原、北見、伊藤、澤田の各理事

隅田川・班女:

シテは同一人物?

観世流 菊池 博
梅若会

数年前、ある謡会の余興として筑前琵琶の演奏を聞く機会があった。演目は「隅田川」と「船弁慶」の弾き語りで合計30分程度のものであったが、その「隅田川」の語りの中で少し気になる表現があった。それは梅若丸の父親の名を「吉田の少将」と言っただけである。けれども観世本(大成本、梅若本)では単に「吉田の某」であり「少将」とは一言も触れていない。これは一体どういう事だろうか。能で「吉田の少将」といえば「班女」である。この曲は野上の宿の遊女である花子が東国へ下る途路の吉田の少将と深く契り、扇を取り交わして別れたが少将の事が忘れられず、昔漢の成帝の寵姫「班婕妤(はんしょうよ)」の詠んだ「怨歌行」という詩から自分を秋になって用のなくなつた扇になぞらへて「班女」と呼ばれている女性の話を美しく謡いあげたものである。

隅田川もの、或いは梅若伝説として、一つのジャンルを形成していた。近松門左衛門は人形浄瑠璃「雙生隅田川(ふたごすみだがわ)」を大阪竹本座で初演した。ここでは吉田の少将と愛妾班女の前、梅若、松若という双子の兄弟、人買い猿島惣太、実は忠臣淡路七郎などをめぐるお家騒動になっている。以後この話が基礎となり、歌舞伎では奈川七五三助(ながわしめすけ)が「隅田川続傳(すみだがわごにちのおもかげ)」で主人公に法界坊を登場させ、また河竹黙阿弥は近松の作を基に惣太を主人公として「都島廓白浪(みやこどりながれのしらなみ)」を発表している。もともと能の筋を忠実に子をつたえた母の狂乱を描いたものとして清元の「隅田川」があるが、ここでも母は「班女前」である。

以上のように能「隅田川」も大衆向けの演劇になると、アツと驚く展開を見せる。梅若丸に松若という双子の兄を登場させるなどまさに天才的である。能の知らない人は、この筋立てが「隅田川」と信じているのかなと思うと、なにか正したい気がする。元雅も世阿弥もさぞや苦笑いをしてのことであろう。

宮越賢治さんと私

宝生流 森川 省三

平成8年4月、久良岐謡曲教室に応募し、許されたので予め下見の為久良岐能舞台を訪れた。まず門の前の掲示板を見ると「宮越記念久良岐能舞台」の文字が目に入った。その瞬間もしやあの宮越さんではと期待しつつ玄関に入ると、正面の額に宮越さんの遺影と久良岐能舞台の由来が書かれており、先に久留米予備士官学校11期生有志諸君が宮越さんにお会いした時「能三昧」との事であったが、このような立派な舞台を残されたことに驚き、まさかその舞台で勉強させて頂くとは、因縁の深さに改めて感激したのであった。

私は昭和18年12月1日学徒出陣により広島連隊に入営、幹部候補生として久留米予備士官学校に入学したが、教育半ばにして突然南方軍教育隊に転属を命じられた。教育隊はジャワ島中部都市スマランにあり、ここで実戦教育を受け、卒業後、昭南(シンガポール)山兵団に配属され、間もなく終戦となったのであった。

思えば昭和19年9月18日、我ら久留米士官学校生は門司港に集結、輸送船「長山丸」に乗船、最初の中継地マニラまでこの船に命を託して出港したのであるが、その船長こそ宮越賢治さんだったのである。

当時すでに日本近海まで制海権を奪われており、門司港外で早くも敵潜水艦に遭遇の警鐘が鳴り響き、いよいよ戦場に突入の武者震いを感じたものである。輸送船団は13隻からなり長山丸は2番船として並航していたが、バシー海峡で突然先頭船を始め3隻が敵魚雷で轟沈、わが長山丸も直撃を受け猛烈な衝撃で飛び上がった。

「遂に来るものが来たか」と退船の身支度をしていると、宮越船長は雪駄履きでデッキから「3番船倉水深測れ」と命じた。長い長い時間に感じられたが「水深異常なし」の報告を受けると「よし」と言って上つていった。

魚雷は不発だったようである。敵の魚雷攻撃に際しては夫々の船の最高速度でジグザグ航行することになっており、船団はバラバラになり当時最新鋭の長山丸は僚船を尻目にいち早く避難、難を逃れたのである。その後幾度となく敵潜に悩まされ乍ら漸く冬木立のような沈船のラストの林を縦って10月13日、船はマニラ港の岸壁に着き、互の武運長久を祈って別れたのであった。

以上、誠に奇しき因縁に結ばれ、米寿を迎えられるのも宮越さんのお陰と感謝し、謹んで御冥福をお祈りする次第である。

「桜川匂ひ」を尋ねて

金春流 関 紀子

能「桜川」の舞台となった磯部稲村神社が筑波山の麓にある。御神体は「桜川匂ひ」という名木で、あたりは桜の名所……。と白州正子著の紀行文を読み一度訪れてみたいと思っていた。

この春4月、神社に電話をして「桜が見頃」との返事をいただき早速出かけた。常磐線、水戸線と乗り継ぎ、田園風景の中を車でしばらく走って、参道の入口に降り立った。

参道も境内も桜の盛り、の筈である。が桜がない。白州さんが文を書かれてから30数年の時間が流れ、少なからず不安は有ったが的中した様で、桜並木は両側に立ち並ぶ住宅地と化していた。本殿は重厚な立派な造りで、先ずはお参りをする。まわりの大木の桜を見廻したが桜川匂ひらしき木が見当たらない。折から宮司さんが出て来られたので、どの木か訊ねてみた。一瞬困った顔をされて「あの桜はもう無い」と言われた。又しても30数年の時の流れ。言葉も無い私を

気の毒に思われてか、一本だけ残っていると案内して下さったのは、宮司さんの邸内で、邸前の広い原には桜の若木が沢山育てられていた。

さて「桜川匂ひ」である。想像していたよりも花は大ぶりで色も白く、それと教えられなければ何処にでも見られる桜の様に思えた。

どの花よりも色が濃く、みっしり咲いた枝を重たげにたれて、時折思い出したようにはらはらと散っている……。白州さんの書かれた「桜川匂ひ」が隣にあった。名を桜川という。網の段で謡われる青柳の糸桜である。私は樹下に佇んで花びらを手に受け、風にゆれる儂げな枝に見とれていた。樺桜はどの木も蕾はまだ硬く、花を見ることは叶わなかった。

桜子の母の墓と伝えられる「蛇ヶ塚」が近くにあると聞き、宮司さんに道を教えて頂いた。個人の住宅の裏手にひっそりと石塚が建って居り、傍らに桜の若木が濃いめの花をつけた枝をさしのべている。それはまるで桜子が母を守っているかの様であった。我が子と再会、幸せな晩年を過ごしたという母の塚に手を合わせ、参道へ戻った。参道わきの公園は、老若の桜が沢山あって翌日から桜まつりと聞

いたが、それらしい仕度も見当たらずひっそりと静かであった。かつては西の吉野、東の桜川と称えられた桜の名所であったそうだが、今はその面影はない。年月の移ろいを思いつつ桜川をあとにした。

ミッションは「会員増」

喜多流 馬場 洋一

今年4月の総会において、小生は横浜喜多会の二代目会長を拝命いたしました。役員の中で最年少の小生を指名した杉山前会長のお考えは「愛好者を増やすには若い人を入れないとならない」で「若い」馬場に会員増の役目を担わせる、ということだったようです。ただ、若いと申しましても還暦は過ぎ、孫もおりますが、能楽愛好者の世界ではまだ「鼻たれ小僧」でございます。先輩諸兄にはご指導を賜わりたく存じます。

横浜喜多会は6月12日、久良岐能舞台において初めてのおさらい会を開催いたしました。「第一回横浜喜多会能楽大会」と銘打ち、8社中、2個人、計40人の参加で、連吟、素謡、仕舞など20番、延べ86人が出演しました。横浜喜多会が友枝昭世師の肝いりでスタートして早10年。やっと思いがかなった1日

でした。

平成12年3月11日に創立され、友枝昭世師、出雲康雅師、栗谷能夫師、内田安信師の社中の方々が加入しました。初代会長には浜友会の杉山昭二先輩が就任されました。創立時の会員は104名でしたが、現在は68名。ここにも減少傾向が如実に表れています。

横浜能楽連盟の新堀豊彦前会長は折に触れて愛好者の漸減を憂い、新たな会員の獲得を唱えていらつしやいました。

「なんばせんとアカン」です。

横浜能楽堂は横浜の能楽の中心的存在として能楽愛好者を増やすための企画、講座等を積極的に展開しています。また、久良岐能舞台も同様です。能楽愛好者が増え、その中から趣味として「謡ってみよう」「舞ってみよう」という方が増えるのを待つ、というのが自然な流れかもしれません。しかし、愛好者が主体となり、もう一歩進めてみませんか。

我々がその楽しさを折に触れて話すことが大切です。友人に、知り合いに、宴席で、声を出すことの気持ちよさ、舞台でうまく謡えた時の達成感などを——それぞれの喜びをお持ちのはずです——自信を持って話すことが大切です。

高齢化社会と呼ばれ、ワークライフバランスの重要性が言われる社会となり、趣味を持ちたいとお考えの方が増えています。若い世代には「歴女」と称される歴史好きの女性も増えていきます。この方たちは「潜在愛好者」です。その背中を押すのが我々愛好者の「仕事」ではないかと思っています。

そして、「趣味に謡をちよつと」というのが「格好いい」と言われる社会になれば最高です。

「よも盡きじ」一考

金剛流 飯田 雅

謡曲との出逢いは8年前。石川島播磨工業(株)「現(株)IH I」豊洲から横浜事業所の、ある部署に異動し、IH I金剛会横浜謡曲部長を前任より引き継いだ。受けたからには、謡う仲間のお人柄を知り、お能が完成した往時の先端技術に触れたく、毎週のお稽古通いが始まりました。最初にいただいたお役は「狸々」のシテ。久良岐能舞台での発表会は当然赤面モノだったが「よも盡きじ」の一節が心に残っていた。お酒の代名詞程度に考えていたが、3年間の愛知勤務を終えて復帰したときに「養老」でこの一説に再会した。頭の隅に残っていた高校の古

典文法助動詞活用を辞書で調べ、副詞「よも」+推量否定の助動詞「じ」で構成されており、「よもや…あるまい、まさかないであろう」の意味であることを知った。

指導していただいている和田先輩のご助言によると多くの曲で使われている。狸々で酒、養老で薬の泉、邯鄲で薬の水、松虫で菊の水、嵐山で川の水、融で流れ等々が『よもや尽きることはあるまい』と語られている。

酒や泉を通じて、古人が重要な水を大切にしたいと考えたのか、一歩進んで、時代は流れても謡曲は永久不滅にというメッセー

ジなのではないかと、考えさせられました。

一方、ある高校教員は、現在の日本語を力強い音声言語として蘇らせる方法として、能を若い頃から大いに謡わせたい、と提言、実践されています。（平成22年4月17日朝日新聞・慶応義塾志木高校速水淳子氏）「つぶやき」を売りにするリーダーが多い時代に、心強いですね。

お能600年の伝統を育て支えたDNAを有する日本に住む人々は、能に触れたい、謡いたいという「心の声」を持っているはず。その声を引き出す機会を作ること我々の使命かと思っています。

京都・奈良気まま旅

観世流 室屋 澄雄

横浜能楽連盟が創立されて62年、IHI謡曲部が佃島の技術研究所で再発足して59年、同横浜謡曲部が45年と、戦後の諸先輩の努力で発展継承されてきていますが、高齢化に伴い将来的には厳しいものがあります。種々のアプローチが実を結び、引き継ぐ人材を発掘できれば、育成の環境は整っているのです。お能は「よも盡きじ」といえるのではないのでしょうか。

ことし、平成22年は平城遷都1300年にあたる「とし」であります。

奈良・京都では、さまざまな記念祭が催されています。

これにあわせて、同期の者相つどい、南は鹿児島・博多・北は北海道から集まり6月第1週に「奈良・京都への気まま旅」をやりました。

総勢20名。久しぶりの再会で学生時代に戻り、語りあい、元氣であったことを確認しました。まずは『平等院』。御園に入るとすぐ左に「頼政」自刃の芝と歌碑が目につきます。

碑文には、
花咲きて みとなるならば
後の世に ものふの

名もいかで のこらん

毎年、5月26日を命日として「頼政忌」が営まれています。

あゆみを進めると阿字池を指呼のうちにして『鳳凰堂』を正対できる、格好の広場に立ってます。

鳳凰が両翼を大きく広げた端麗な姿を観せてくれます。南側に在る国宝館、鳳翔館に向かい『鳳凰』『梵鐘』等の国宝級26体が保存・展示されています。

これら素晴らしい展示に2時間、素晴らしい展示に2時間が短く感じる程でした。

翌日、早朝から「女人高野」として知られる「室生寺」。花の寺として、関西で人気のある「長谷寺」に詣でました。

最後は「石舞台古墳」約2300トン、長さ7・8メートル、巾3・4メートル、高さ4メートルは日本最大という。その大きさに驚くばかりでした。

能楽堂だより

二十二年十月以降の公演

横浜能楽堂では、次のとおり公演を開催いたします。

APEC横浜開催記念

特別普及公演

十一月十三日(土)

午後二時三十分開演

狂言「呼声」(大蔵流) 山本東次郎
能「羽衣」(観世流) 関根祥六
※英語音声ガイドがあります

チケット発売

九月二十五日正午から

(初日は電話・Webのみ)

S席四千元、A席三千五百円、B席三千元

第二十七回横浜かもんやま能

十一月二十日(土)午後二時開演

能楽師による実技と解説

金子敬一郎・笠井賢一

狂言「栗焼」(大蔵流) 茂山千五郎

能「鬼界島」(喜多流) 栗谷能夫

チケット発売

九月二十五日正午から

(初日は電話・Webのみ)

S席四千元、A席三千五百円、B席三千元

普及公演「バリアフリー能」

三月十九日(土)午後二時開演

狂言「鐘の音」(大蔵流) 山本泰太郎

能「野守」(金春流) 山井綱雄

チケット発売

電話・Web・fax・メール

一月三十日(日)正午

(初日は電話・Web・fax・メールのみ)

※電話・Web窓口での申込

が困難な場合にfax・メール

受付がご利用頂けます

S席四千元、A席三千五百円、

B席三千元

※介助者は一名まで無料

お問い合わせ・お申し込みは、

☎〇四五(二六三)三〇五五まで。

《編集後記》

平成22年度総会において3号議案の「役員改選」の項目で、今回はかなりの人の交代がなされました。「幽玄」の編集委員につきましても多くの方の交代がありました。

△「幽玄第39号」まで編集委員として活躍されました観世梅若会三谷、宝生流小林、金春流三浦、喜多流馬場の4名の理事の方が退かれました。また今度も「幽玄」につきましてはご協力の程宜しくお願いいたします。△「幽玄第40号」からは次に示します新しい編集委員の下で行うことになりました。編集委員には、金剛流糸、観世流室屋、観世梅若会桑原、宝生流山添、金春流澤田、喜多流伊藤の各理事が担当することになりました。どうぞ宜しくお願い致します。△編集委員からお願い。各流派の皆様からの数多くの投稿を心よりお待ちしております。

横浜能楽連盟 連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合
〒247-0014 横浜市区公田 一九〇―五

FAX 〇四五―八九二―六三六二

◎電話の場合 横浜能楽堂

TEL 〇四五―二六三―三〇五〇